

目標を明確にしたプロジェクト型授業で、自ら考え表現できる「使える英語力」を育成

東京都 国分寺市立第一中学校

東京都国分寺市立第一中学校は、英語の4技能5領域をバランスよく育てることを目指し、レッスンごとに目標となるタスクを設定したプロジェクト型授業を全学年で実施している。指導内容も精選し、講義形式ではなく、生徒が自ら考えて表現する機会を数多く設けることで、高校入試にも対応できる力を育成している。

オリンピックをテーマに 自分の思いを英語で表現

2020年12月中旬、東京都国分寺市立第一中学校の3年生は、相沢秀和先生とALTのチーム・ティーチングによる、スピーキングとライティングの授業を受けていた。既に教科書の学習は修了しており、高校入試を意識しながら「使える英語力」を身につけようと発展的な学習に取り組んだ。

取材日の授業のテーマは、東京オリンピック・パラリンピック（以下、東京五輪）。生徒は、ワークシートに示された①Picture Describing、②One Minute Chat、③One Minute Speech & Word Counter、④Answer this question in three or more sentencesの4つのタスク（P.16図）に取り組んだ。まず①では、五輪のマークに「TOKYO OLYMPIC 2020+1」と描かれた絵を見て思ったことを3文以上で書く英作文に取り組んだ。②では、ペアワークで東京五輪が楽しみかどうかを話し合い（P.17写真1）、③では、ペアの相手に東京五輪の1年延期をテーマに1分間でスピーチし、聞き手は使われたワード数を数えた。④では、②や③で話したことを踏まえ、東京五輪の延期について自分の考えを英文で書いた。

授業はほぼ英語で行われ、各活動の間に行われた中間指導では、伝え

たかったけれどもうまく英語にできなかった表現について、クラス全体で考え、共有することに時間を割いた。

タスクの中で、生徒は自分が知っている単語やジェスチャーを使って懸命にALTに質問。「心を一つに」は「We will be all behind our Olympics.」、「3位決定戦」は「Third place play-off」といった表現例が示されると、「そう表現すればよいのか」と納得した様子を見せた。

「ALTとのやり取りを通じて、新たな語彙や表現を獲得し、また自分の知識を駆使して考えを伝えられた喜びを体験することで、積極的に英語を使おうとする姿勢を生徒に育みたいと考えています」（相沢先生）

相沢先生は、ALTが複数の表現例を示すたびに板書した（P.17写真2）。

「印象に残る表現や知りたいと強く思う表現は、生徒一人ひとりで異なります。板書した多くの表現から、自分が使いたいものを選んで獲得してほしいと考えています」（相沢先生）

授業の最後に行ったタスク④では、どの生徒の英作文も、タスク①で書いたものに比べて明らかに語彙数が増え、内容も深まっていた（P.17写真3）。授業を受けた生徒は、次のように話す。

「先生の説明を聞くだけでなく、自分たちが英語を使って活動することが面白くて、あっという間に時間が



指導教諭

相沢秀和

あいざわ・ひでかず

英語科。2014年度、東京都英語教育戦略会議専門部会委員。2017・18年度、東京都「生徒の英語によるパフォーマンスを高めるための研修」講師。

学校プロフィール

◎ 1947（昭和22）年開校。確かな学力と豊かな心を育む教育を推進する。2019・20年度、東京都「持続可能な社会に向けた教育推進校」指定校。

校長 後藤正彦先生

生徒数 633人 学級数 19学級

電話 042-322-0641

URL <http://www.city.kokubunji.tokyo.jp/smp/kurashi/1012309/1008645/1001229/index.html>

過ぎました。今まで知らなかった単語や表現を学べただけではなく、既に自分が持っている知識だけでも、工夫すれば様々な表現ができることに気づきました」

最初にアウトプットの目標を提示し、意欲を引き出す

同校の英語の授業は、例年、全学年ともに2学期末か3学期初めまでに教科書による学習を終えるため、年度末までは活動中心の学習を行っている。2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響による臨時

Speaking力 & Writing力 養成

Tokyo Olympic Games in 2020 +1

Task 1: Picture Describing

-Look at this picture and describe the situations in three or more sentences.

編集部注:この部分には、オリンピック・パラリンピックの五輪マークの下に「TOKYO OLYMPIC 2020 +1」とそえられた絵が入っています

Task 2: One Minute Chat

First Question: "Are you looking forward to the Tokyo Olympic Games?"

Task 3: One Minute Speech & Word Counter

Today's Topic: Tokyo Olympic Games in 2020+1

My Speaking WPM

	W/M
--	-----

Task 4: Answer this question in three or more sentences

The Olympic Games have been delayed for a year because of COVID-19. I am sure that Japanese people are having a hard time as hosts. I want to know how Japanese people think about the Olympic Games.

* 第一中学校提供資料を基に編集部で作成。

休業があったが、学習内容を精選し、進度をやや早めたことで、年間指導計画を大きく変えずに進められた。

タスクを設定したプロジェクト型授業は、教科書を中心とした1・2学期の通常の授業でも行っている。スピーチやプレゼンテーションなどのタスクは各レッスンの最後に行うが、その内容をレッスンの冒頭に提示。タスクの達成に必要な力をあらかじめ設定し、その育成に主眼を置いて毎時間の授業を構成する*。生徒は、タスクの達成という目標を持つため、進んで英語を使い、よりよい表現方法を身につけようとする積

極性が、授業の中で自然と発揮されるという。

そうした授業を通じて培われた基礎・基本の力や積極的な学習姿勢は、発展的な学びや高校入試にも必要とされる重要な力だと、相沢先生は語る。

「生徒が『もっとよい表現をしたい』『自分の思いを伝えたい』と悩んだ点や疑問を積極的に提示することによって、ペアワークやALTとのやり取りが活性化し、クラス全員の学びが深まります。知識や技能を学び、正解を見つけるだけで満足するのではなく、状況に応じて自分で考え表現する力や姿勢があつてこそ、知識

や技能は『使える英語力』になります。それらは、外国人とのコミュニケーションで使う英語力はもちろん、高校入試で求められる英語力の伸長にも必要とされる力です」

プロジェクト型授業には、活動を多く取り入れながら、スピーディーに授業を進められるという利点もあると、相沢先生は説明する。

「教科書の本文から重要な文法や表現などを抽出し、それらを効果的に育成できる学習の内容や順序を検討して、授業ごとにワークシートを作成します。授業準備には多少の時間と手間がかかりますが、そうした作業を通じて、教員が事前に教科書全体や单元ごとの内容を理解して指導内容を精選するため、授業進度をコントロールしやすくなります」

ワークシートには学習の要点が整理されているため、教員は授業中の板書を簡略化でき、生徒はノートの代わりとするなど、ワークシートが授業の効率化を支えている。ワークシートは、教科団で検討して作成し、学年共通で使用するため、学習内容や進度、評価基準などを統一できるという利点もある。

英語を英語のまま理解し、表現できる状態を目指す

同校では、「使える英語力」を育むために、英語を英語のまま理解したり表現したりする思考力の育成も重視している。その一環として、教科書の内容理解の学習では、訳読を行わず、英文のまま読み取りをする。

まず、生徒には、教科書を読まずに授業に臨むように伝え、授業では、本文を読み上げるネイティブの音声数を数回流した後、本文を目で追いつながりながら再度音声を聴かせて、大まかな文意を捉える活動を行う。

「音読は内容の読み取りに効果的で

* タスクを設定したプロジェクト型授業の概要や学習評価（ルーブリック評価）の方法は、本誌2018年Vol.2特集P.12を参照。



写真1 ペアワークでは、英作文を見せ合うとともに、表現に悩んだ点を相談したり、相手の誤った表現を指摘したりと、学び合う姿が見られた。

写真2 相沢先生は、ALTが例示した表現をすぐに板書。生徒はそれを見て、自分の英作文に使えると思った表現などを、ワークシートに書き込んだ。

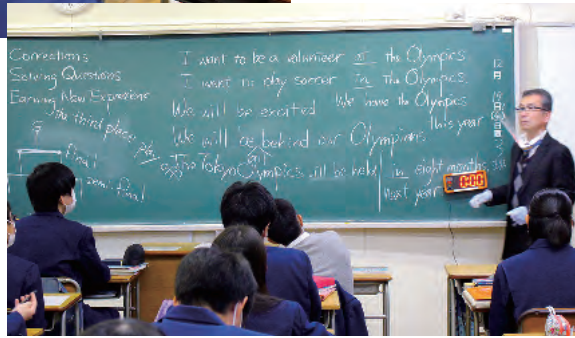


写真3 授業の最後に、導入時と同じテーマで再び英作文を書いた。授業で学んだ単語や表現を使ったり、自分で表現を工夫したりと、生徒は思い思いに鉛筆を走らせた。

すが、テスト会場など、音読ができない場合もあります。目で文字を追いつながりながら音声を聴く状態は、いわば脳内で音読をする練習になるため、初見の英文でも黙読で内容を捉える力が育っていきます」(相沢先生)

大意を把握できたら新出の単語や表現を指導し、本文の趣旨の理解度を確認する。そして、音読を繰り返して理解を深めた後、最後に、本文の内容読解の問題に取り組む。

英作文の指導では、英語で考える力の育成を重視している。実は、2020年の臨時休業明けに、3年生に英作文の課題を出したところ、日本語を直訳したようなぎこちない英文が多く見られた。

「まず日本語で文を書き、直訳し、

分からない単語を和英辞典で調べる生徒が多かったです。そうした学習ばかりを積み重ねても即興的に英語で表現する力は育たず、実際のコミュニケーションに役立つ英語力は身につけづらいものです。そこで、最初に言いたい内容を考えてから、自分が知っている英単語や英語表現をあてはめていくイメージを持つように指導しています」(相沢先生)

そうした思考過程を育成するために、相沢先生は、あえて難解な語句が含まれる日本語の文を与え、和英辞典を使わずに要点を英文で説明する課題を出すことがある。生徒は、直訳できない言葉をいかに自分の知っている英語で表現するかを試行錯誤し、その過程で次第に表現を工

夫する力を身につけていく。

そのように和文を直訳しない英作文の基本を十分に定着させた上で、主語や動詞、目的語、副詞といった文法構造に目を向けさせて、より複雑で正確な英作文を書く指導を行う。さらに、和英と英和の両方が収録された辞典を持たせて、和英辞典で調べた単語は英和辞典でも必ず調べ直し、品詞や例文を参照して意味や用法が正しいかを確認させている。

新学習指導要領に沿って 指導内容を一層充実

新学習指導要領の全面実施後も、同校の英語の授業スタイルは変わらない予定だ。新学習指導要領で重視している、生徒が自分で思考し英語で表現する活動や、年間十数回行うパフォーマンステストの実施など、4技能5領域をバランスよく育成する指導を既に行ってきたからだ。語彙の学習でも、他校が使う教科書からも身につけさせたい語句を抽出し、通常より多くの語彙を指導しているため、新学習指導要領での単語や熟語の数の増加にも十分に対応できると考えている。

一方で、小中接続については、これまで以上に校区の各小学校の指導状況を確認し、生徒の学習状況に応じた支援の必要性を感じている。

「小学校で英語が教科化されたことで、学校間や教員間で指導の差が拡大するのではないかと危惧しています。その差を小さくし、中学校入学前に子どもを英語嫌いにしないように、私自身もできることは協力したいと考えています。また、新学習指導要領に沿ってワークシートの改訂を予定していますが、特に若い世代の教員の意見を取り入れながら、『使える英語力』の育成に一層努めていきます」(相沢先生)